

北朝鮮による 拉致問題は 現在進行形の 私たちの問題です

命には限りがあります。
死んでしまつたら、
もう会うことはできません。

平成19年11月15日 新潟における県民集会にて
「めぐみへ 横田早紀江、母の言葉」 草思社より



母 早紀江さんの和服を着た横田めぐみさん
(昭和52年正月、新潟の自宅で父親の滋さん撮影)

あらゆる世代を通じて、市民一人ひとりが自らの問題として
決して風化させることのないよう声を上げ続けていきましょう。

拉致問題とは

1970年代から1980年代にかけて、多くの日本人が不自然な形で行方不明となりました。行方不明事案に対する当局の捜査や、亡命北朝鮮工作員の証言によって、北朝鮮による拉致の疑いが濃厚である複数の事案が明らかになりました。

2002年に北朝鮮が日本人拉致を認め、現在、日本政府が認定している拉致被害者17名のうち5名が帰国しましたが、残りの12名の帰国は実現していません。その中には、大阪で働いていた方(原 敕晁(ただあき)さん)もおられます。

2004年5月の日朝首脳会談において、北朝鮮側より、直ちに真相究明のための徹底した調査を再開する旨の明言があったにもかかわらず、未だ北朝鮮から納得のいく説明はありません。

拉致問題の解決に向けて

拉致問題は政府が取り組むだけでは十分ではありません。

大阪市では、政府拉致問題対策本部、大阪府、大阪府内市町村と協力し、あらゆる世代において、市民一人ひとりが自らの問題として認識し、決して風化させることなく声を上げ続けられるよう、積極的に啓発活動に取り組んでいます。

北朝鮮人権侵害問題啓発週間(毎年12月10日～16日)には、拉致問題への関心を高めていただくため、市役所でのパネル展示をはじめ、街頭キャンペーンやアニメ上映会の開催といった取組を実施しています。また、大阪府とも連携して、この週間の趣旨に賛同された施設をブルーにライトアップしています。

特定失踪者

認定された拉致被害者のほかに、北朝鮮によって拉致された可能性を排除できない人が多く存在しているとの認識のもと、政府では関係省庁・関係機関が緊密に連携を図りつつ、国内外からの情報収集や関連する捜査・調査を強力に推し進めるなど、真相究明に努めています。

ブルーリボン

拉致被害者と家族の再会を願う、リボン・バッジの色は、日本と北朝鮮をへだてる「日本海の青」そして被害者と家族を結ぶ「青い空」をイメージしています。



詳しい情報は、各ホームページをご覧ください



大阪市



大阪府



政府拉致問題対策本部

発行：大阪市市民局ダイバーシティ推進室人権企画課